



メンバーからの ほつとレター

次男は、三人きょうだいの真ん中だった。

夫も私も「子供は自分のものではない」と考えていた。親の役目は、社会に出すまで、後は自分の力で切りひらいていける様に教育をする事と考えていた。三人には外国での研修にも行かせた。自立した子にするには、親元を離れる経験をさせ、大学を出さなければ、と強く思った。

一方、夫は転勤や海外出張が多く、父親不在の生活と転校が続いた。「母親がしっかりと育てれば子どもはちゃんと育つ」という母や姑の言葉が重く響いていた。

次男は、小学校で「授業についていけない」と言われたが、なんとか勉強を教え込もうと更に躍起になった。

彼なりに頑張り、一浪したが大学に入学。無事卒業し、就職もした。自分でアパートを借りて自活しはじめた。親の務めはほぼ終わり、後は自分でやっていくものと思つた。しかし、人間関係がうまくいかずに一年で退職。再

就職したがこれも一年で辞める事になった。この時、私はゆつくり話を聴いて休ませることをしなかった。甘やかしてはいけなかつたと思つたからだ。叱咤激励のつもりで「あなたも悪い」と言つてしまった。

29歳の時、脂肪肝で入院したが、その後もフリーターをしながら自活し実家には戻らなかつた。

40歳を越えたある時、「頭をぶつけた」と連絡してきた。「何ともない」と言っていたが、それから、一ヵ月半後に家に来ていて、突然雷が鳴つた時、体が硬直し震えた。した。「どうした！大丈夫？」と体をさすると、すぐに元に戻つたが、「窓の外に女の幽霊がいた」と言つた。稲妻のせいと思つたその時は心配もしなかつた。

翌日夕食の声をかけたが、返事がないので様子を見に行くと、布団の中で硬直し震え

それでも息子が笑顔なら

～外傷性てんかんと共に生きる～

ていた。様子があまりにおかしいので、夫がすぐに救急車を呼んだ。救急隊の人は、精神面を疑い、精神病院に搬送。投薬のみで帰宅を勧められたが、本人が怖がり、入院を切望した。

受け入れ先を探す数時間のあいだ、「ごめんね。ごめんね」と言いながら私は次男の背中をさすり続けた。今までの挫折に対して、話を聴かずに叱つた記憶がよみがえり、後悔でいっぱいになつていた。「私の責任なのだ」と。その夜、千葉の精神医療センターに転送、「外傷性てんかん」と告げられた。

あの時は私なりに一生懸命だったのだからと思おうとしたが、それは逃げになるように思い、後悔の中に居ようと思つた。不思議に気持ち少しづつ楽になつた。「いま思うと、あなたにはかわいそうなことをしたと思う」と素直に謝れた。次男からは「かわいそうと思つてくれればうれい」という言葉が返つてきた。もつと非難の言葉が返つてくると思つたのに。

次男は実家に戻り、一緒に暮らすようになった。しばらくしたある日、彼が「お母さんは幸せだね」と言つた。「えっ、どうして？あなたのような子がいるのに」と思つた。でもエンカウンターで話した時、「それは幸せの質の問題ね」と指摘されて気づいた。世間一般から見た尺度ではない。生活の中の小さなことに幸せがあるということ。

このところの穏やかなくらしの中で、息子はお風呂をピカピカにし、毎日々飯の支度をしてくれている。簡単な料理だが、結構上手に作る。「美味しいよ」というと嬉しそうにしている。「味付けは俺の口に合つて美味しい」と夫も言ってくれる。次男を「認めた」のは、これが初めてかもしれない。

どんな息子でも受け入れようとしている私がいる。息子の笑顔に幸せを感じている私も確かにいる。傾聴を学んで今の私があると実感できるこの頃である。

先の事を考えると、不安もあるが、何かあつた時はその時考えればよいと思う。今の三人の穏やかな生活を大事にしたいと思う。

(K・O)

《身近な「コミュニケーション」》

よくある会話

友人 「あーあ、今夜何しよう。何かいいメニューない？」
私 「カレーなんか、どう？」
友人 「昨日したばかり・・・」
私 「じゃ、おでんは？」
友人 「子供が嫌いな」
私 「あれダメ、これダメって、じゃ聞かないでよ！」
友人 「だって、困っちゃったんだもん」
私 「そこをやるのが主婦でしょうが。ダメダメ主婦よあんな」
友人 「ええー！そこまで言わなくてもいいじゃない」
私 「家族もお気の毒だわね」
友人 「もういい！」

傾聴をこころがけた会話

友人 「あーあ、今夜何しよう。何かいいメニューない？」
私 「昨日は何をしたの？」
友人 「カレー」
私 「カレーはみんな好きなの？」
友人 「ええ。おでんは子供が嫌だし・・・」
私 「子供の好きなものがないの？」
友人 「主人は食べないことが多いしー」
私 「子供中心のメニューを考えたいのね」
友人 「そうだ。久しぶりにハンバーグにしよう」
私 「ハンバーグはみんな好きなの？」
友人 「ええ。主人も好きなの。ありがとう一緒にかんがえてくれてー」



(Y・E作)